

ガルトゥング平和学の現代的意義について

— 現代において戦争は暴力か —

藤田 明史

平和研究者

はじめに——3つの練習問題

本稿の目的は、ガルトゥング平和学の体系をできるだけ簡潔に示すことである¹⁾。その上で、そのもつ現代的意義を考えたい。

まず、図1をじっくり眺めてみよう。そして、練習問題に挑戦してほしい——今度は迅速に！

(1) オレンジ

テーブルの上にオレンジが1つ。そこに2人の子どもがやって来た。さて、何が起ころうか？

(2) ドレス

今、私は43歳。25年前卒業した高校の同窓会が今夜あるのです。楽しみにしているのだけれど、少し気になっていることもあるのです。自分の年齢にはちょっと若すぎる感じのドレスを着ようと思っているのだけれど、少しピタリしていて、少しスカートが短い感じがするのです。どうしようか迷っています。私には18歳になる娘がいます。ちょうど25年前の自分と同年齢です。彼女には人生における2つの重要なことを教えてきました。他人に思いやり (considerate) があること、それに、正直 (honest) であること。私は、ドレスを着て彼女の部屋をノックし入室しました。私には美しく見えました。私にとってこの日は大切な1日であることを、彼女は知っています。私は「どう思う？」と聞きました。

娘は答えに窮している。さて、娘へのあなたのアドバイスは？

(3) 国境紛争

気温や雨量の変動による川の分水界の変化に起因して、500平方キロメートルの地域における2国間の国境紛争は、1941年以来3度の戦争を引き起こしてきた。1998年にそれはきわめて簡単に解決された。さて、どんな方法によって？

図1 コンフリクト—5つの基本的な結果

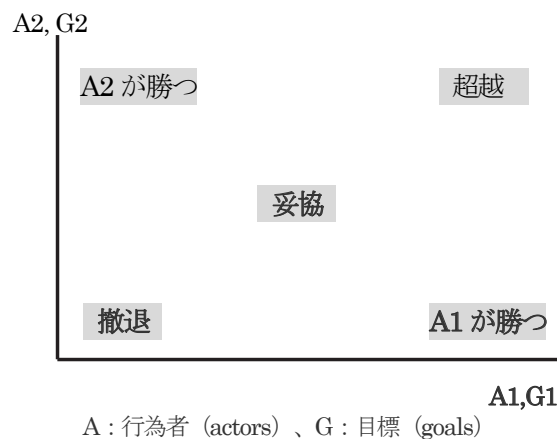


図1は、アクター (actors) がA1とA2の2者、目標 (goals) がそれぞれG1とG2のコンフリクトを示す。2次元のX-Y平面上で代表的な点が5つ([1]～[5])あり、それらを次のように名付ける。

- [1] A1が「勝つ」。
- [2] A2が「勝つ」。
- [3] 紛争から「撤退」する。

[4]「妥協」する。

[5]「超越」(トランセンド)する。

「ドレス」に即して表現すると、娘の答としては、たとえば次のようになるだろう。

[1] 母親への「思いやり」の表現：「赤いドレスでとても良くお似合いよ」

[2] 自分に「正直であること」の表現：「赤は派手すぎる！ 青いドレスを着てほしいわ」

[3] 撤退の表現：「いま忙しいから後にして！」

[4] 妥協の表現：「お母さんが良いと思うのを着て行けば」

[5] 超越の表現：「 ? 」

[5] の超越とは、A1 (母への「思いやり」のある自己) と A2 (自分に「正直」な自己) の両方とも (both-and) が成立するという意味である。どういう表現があり得るだろうか。

「お母さんには素晴らしい人間性 (personality) があるわ。だから私は尊敬しているし、お母さんに育てられて良かったと思っている。そして、私はあのブルーのドレスの方が、誠実で思慮深いお母さんの人間性によく似合っていると思うのよ。」

あらゆるコンフリクトにおいて、「超越」(トランセンド transcend) の探究が平和学の主要な課題となる。トランセンドとは乗り越える (go beyond) という意味である。

しかしこれは、きわめて困難な課題であることを銘記したい。本例において、勉強に没頭する娘が、思わず、「いま忙しいから後にして！」と言ってしまったとき、何が起ころうだろうか。母親はショックを受けて、寝込むかもしれない。それほど彼女にとって自らの人格をかけた問いだったのである。当初、娘の心の中の葛藤であったものが、この一言によって、母子間の長引く紛争に転化・拡大するかもしれない。

図1の含意するところのもの、とりわけ「超越」の意味を、われわれは十分に玩味しなくてはならないのである。

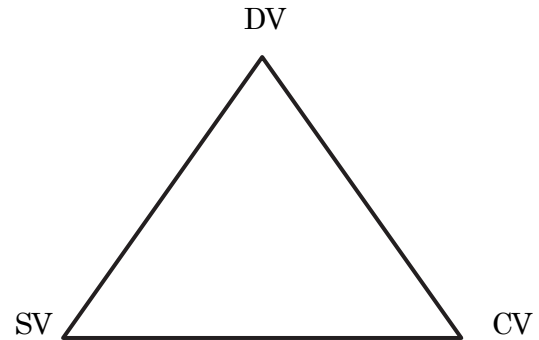
1. ガルトゥング平和学の基礎的諸概念(その1)

(1)「暴力」概念による平和の定義

「平和とは、あらゆる種類の暴力の不在ないし低減である。」

(2) 暴力とは何か——暴力の三つの形態 (図2)

図2 暴力の三角形



- ① 直接的暴力 DV : direct violence
(極端なケース) 迅速で意図的な (intended) 殺人
- ② 構造的暴力 SV : structural violence
(極端なケース) 緩慢で意図しない (unintended) 殺人 — immature death
政治的抑圧 political repression、経済的搾取 economic exploitation、文化的疎外 cultural alienation
- ③ 文化的暴力 CV : cultural violence
「文化的暴力とは、神や祖国の名のもとに殺しを犯すことや、人類のなかの様々な弱者を根絶やしにするために、「弱者切り捨て」的発想で人々を窮乏のうちに死なせることなど、直接的・構造的暴力を正当化・合法化するために役立つ文化のもつ様々な側面である。」

(3) 暴力概念の拡張——ガルトゥング平和学の核にある思想

現代平和学の生誕を告げた「暴力・平和・平和研究」(1969)では、まず暴力について次のように定義される。

「人間が現実、肉体的・精神的に達成したものが、彼らの潜在的な実現可能性を下回るような、そうした影響を彼らが被ったとき、そこには暴力が存在する。」

種々の暴力をわれわれは日々経験する。するとこの定義は何を意味するのか。それは次の引用に明らかである。「われわれがなぜ狭義の暴力概念を拒否しているのかはやがて明らかになる」と。ここでいう「狭義の暴力概念」とは、「行為者（アクター）により結果を意図して行われる、肉体の無力化または健康の剥奪（その極端な形態である殺人も含めて）」のことである。そして次のように続く。「もしこれが暴力の全てであれば、そしてその否定が平和と見られるのであれば、平和が1つの理想として立論されるとき、排除されるものはあまりにも少ない。とうてい受容できない社会秩序が平和と両立することになる。ゆえに拡張された暴力の概念が不可欠になる。」

ここから「直接的暴力」に加えて「構造的暴力」の概念が導入された。

（4）「文化的暴力」の概念の導入

「暴力・平和・平和研究」では、文化的暴力の概念はまだ現れていない。それが定義され、その含意が十分に展開されるのは「文化的暴力」（1990）においてである。文化的暴力の概念の導入によって広がる視野の拡大を述べた次の箇所は重要である。

「おそらく平和学は、アカデミックな研究の殿堂に明らかに欠けている、重要な科学的事業の土台を築くのはいくらかの貢献ができよう。すなわち、人間文化の科学、「文化学」（culturology）である。今日、そうした分野は、「高い」文化に対しては「人文学」、「低い」文化に対しては文化人類学に分割されている。そして哲学、思想史、神学等の断片が、その間隙を埋めている。「文化的暴力」の概念はそのすべてにわたるものである——ちょうど「構造的暴力」の概念が社会科学のすべての範囲にわたるように。」

（5）「暴力」概念の歴史性

暴力は潜在的なものと現実にあるものとの間の差異の原因として定義される。そして更に、その原因に関して一つの条件が付加される。回避可能（avoidable）であるという条件である。

「もし人が18世紀に結核で死亡したとしても、これを暴力と考えるのは困難である。それはほとんど不可避であったに違いないからだ。だが、世界に医学的な諸資源があるにもかかわらず、今日、その人が結核で死亡したならば、われわれの定義によれば、そこには暴力が存在する。」

この点はあまり注目されないが、きわめて重要な論点である。現代に生きるわれわれは次の問いを発することができるし、また発すべきであろう。

《現代において戦争は回避可能か？》

すなわち、戦争が回避可能となるとき戦争は暴力となるのである。

2. ガルトゥング平和学の基礎的諸概念（その2）

（1）「紛争」（コンフリクト conflict）概念による平和の定義

「平和とは、非暴力的（nonviolent）かつ創造的（creative）な紛争の転換（conflict transformation）である。」

（2）「紛争」とは何か

「紛争とは、行為者（actors）の有する目標（goals）間の不両立性（incompatibility）のことである。」

（3）紛争の3要素——紛争の三角形 ABC（図3）

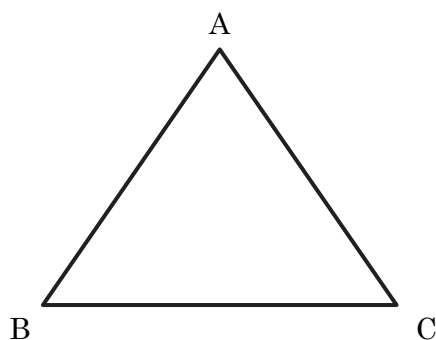
紛争には、まず行為者が存在する。行為者は目標を有し「行動」する。行動の基礎には行為者の「態度」がある。そして行為者の目標間の不両立性すなわち「矛盾」が存在する。これら3つの要素、態度（Attitude）・行動（Behavior）・矛盾

(Contradiction) を紛争の三角形 ABC という。

3要素の相互関係において紛争は超越・転換 (transcend and transform) していく。

紛争の定義それ自体には何ら暴力的なものは含まれていない。紛争転換の過程においてしばしば暴力が発生する。しかし、必ず暴力が発生するというのではない。紛争はむしろ人間発達のチャンスなのである。この点の理解は決定的に重要である。

図3 紛争の三角形 ABC



(4) 構造的紛争 (structural conflict) の概念

「構造的紛争」 (structural conflict) とは何か。これを明らかにするには、「紛争の複雑度」 (C: conflict complexity) の概念の導入が便利である。1つの紛争において、行為者の数を M、目標の数を N とする。紛争の複雑さの指標を $M + N$ とする。とくに、 $M = 1, N = 2$ の場合 (葛藤 dilemma)、および $M = 2, N = 1$ の場合 (争い dispute) を「基本紛争」 (elementary conflict) と呼ぶ。基本紛争の複雑度を 1 にするために、複雑度 C を次のように定義する：

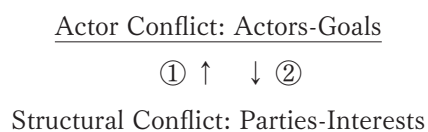
$$C = M + N - 2 \quad (*)$$

(*) において、 $C = -2$ ($M = 0, N = 0$) の場合とは何か。ここでは行為者も目標も零である。 $M = 0$ (または $N = 0$) とは、 $m - m [= 0]$ (または $n - n [= 0]$) を意味する。すなわち、行為者がもいた場所から出て行き、目標ももとの場所から無くなること、比喩的にいえば、乗客がその目標とともに紛争という乗物から降りることを意味する。下車した乗客はもはや行為者ではなく、その「目標」はもはや目標ではない。これを「当事者」

(party) とその「利益」 (interest) と呼び、このような状況を「構造的紛争」 (structural conflict) と名付ける。

構造的紛争では、当事者は目の前の利益を追求する。他方、行為者は明確な価値意識によって基礎づけられた目標を追求する。構造的紛争とは区別して、後者を「行為者紛争」 (actor conflict) と呼ぶ。行為者紛争と構造的紛争とは、絶対的な区別ではなく、相互間の移行が起り得る。

図4 行為者紛争と構造的紛争の相互移行²⁾



①の構造的紛争から行為者紛争への移行は、構造的・文化的暴力からの当事者の解放 (表層・深層構造および表層・深層文化の認識) によって行なわれる。②の行為者紛争から構造的紛争への移行は、行為者に対する直接的暴力 (苛め、言葉の暴力、弾圧、「記憶の他殺」等) によってもたらされる。

3. 平和のイメージ

(1) 2つの平和概念を同定 (identify) する

ガルトゥング平和学は、2つの基本命題を基礎にしている。改めて並置する。

I : 「平和とは、あらゆる種類の暴力の不在ないし低減である。」

II : 「平和とは、非暴力的かつ創造的な紛争転換である。」

I は「暴力」 (violence) 概念による、II は紛争 (conflict) 概念による平和の定義である。次の問いを発してみよう。I の平和と II の平和とは同じものだろうか？ 実は、2つの平和を同じものと見ることの中に、ガルトゥング平和学の体系 (そのあらゆる展開の可能性) が成立するのである。

表 1 平和＝消極的平和＋積極的平和

	直接的平和 (DP)	構造的平和 (SP)	文化的平和 (CP)
消極的平和 (NP)	(1) DV の不在＝停戦 廃墟・墓場	(2) SV の不在＝無搾取 無構造＝アトミー	(3) CV の不在＝無正當化 無文化＝アノミー
積極的平和 (PP)	(4) DP の構築 ＝協力	(5) SP の構築 ＝衡平・均等	(6) CP の構築 ＝対話・調和
平和 (NP + PP)	(1) + (4)	(2) + (5)	(3) + (6)

(2) 消極的平和 (negative peace) と積極的平和 (positive peace)

消極的平和とは暴力が不在の状態をいう。それは、暴力でも平和でもない状態である。しかし平和を志向し、そこから平和が生まれうるという意味で消極的平和 (NP) と名付ける。

停戦を考えよう。過酷な戦争が終わった。既存の秩序が崩壊し、人々は自由を得た。しかし、外には廃墟が拡がり、内には虚無が支配する。人間は、長期にわたって、このようなカオスの状態を「生きる」——単に「生きている」のではなく——ことはできない。

人々は、協力し合い、人と人との衡平な関係性を結晶させ、新しい秩序の形成に意識して努めるだろう。このような平和的なコスモスの創造を積極的平和 (PP) と名付ける。

NP と PP はコインの両面であるとも表現できよう (表 1)。

さて、暴力概念による平和の定義と、紛争概念による平和の定義との関係を図で表現してみよう。

図 5 には、暴力に起因する苦痛 (S: suffering) を回避し、目標の達成 (F: fulfillment) を追求する行為者 X と Y の運動が 2 次元平面上に表現されている。X と Y の目標は、両者とも、人間の基本的必要 (BHN: basic human needs) の充足であるとしよう。そして、目標間の不両立性という意味において (BHN も有限である)、両者はコンフリクトの状態にある。X と Y の運動は、両者が上昇または下降する同方向に動く場合、および、一方が上昇し他方が下降する逆方向に動く場合の 2 通りとなる (ここで例えば X が上昇するとは、図上では X 軸に平行して右方へ動くという意味である。他の場合も同様)。X と Y はコンフリクトを媒介に

固く結合しているから、その運動は 2 次元上の点の軌道として表現することができる。

原点は、消極的平和を表現している。消極的平和を起点に行為者 X と Y との関係はどのような軌道上を動くだろうか。

1 つの可能性は、第 1 象限が表現する積極的平和 (positive peace) の方向へ。そこでは X と Y の両者共が上昇する。理想としては、衡平 (equity) の関係を保持しつつ両者が相互確証至福 (MAB) を目指す直線の軌道上を進む。

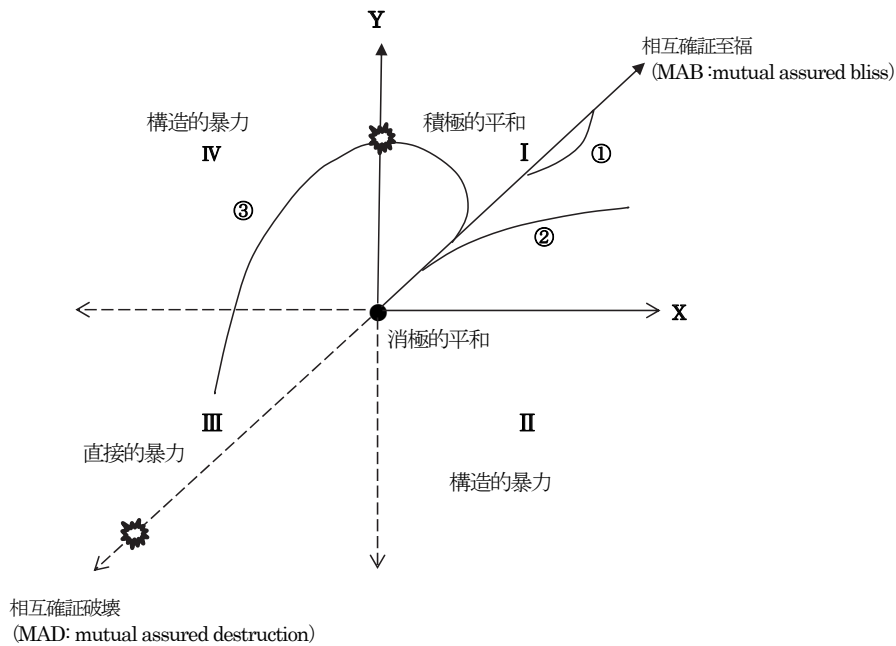
逆の可能性もあり得る。原点を起点に両者とも下降し、最悪の場合、相互確証破壊 (MAD) に向かう直線の軌道上をひたすら突き進む。

人間は、消極的平和を起点に MAB の方向に行くことも、その正反対の MAD の方向に行くこともできる。そうした能力を人間は有している。どちらの方向に行くかの決定は、人間のまさに究極の選択といえよう。

図において理想的な積極的平和の軌道 (以下、「積極的平和軌道」と名付ける) から外れる 3 つの曲線が描かれている。

①は、X・Y 両者の運動が積極的平和軌道から一時的に外れるものの、非衡平を正す諸力が働き、元の軌道に直ちに戻る場合である。②は、積極的平和軌道から外れたままで推移するが、両者間の格差を縮小しようとする諸力が不断に働き、軌道が第 I 象限すなわち積極的平和内に留まる場合である。問題は③である。運動が積極的平和軌道から外れると、格差は増大し続け、Y 軸に衝突し (そこでは X の達成は 0 である)、第 IV 象限すなわち構造的暴力内に入り (X の達成は負になり、Y の達成も減少に転ずる)、ついには直接的暴力が常態である第 III 象限に突入する。いくつかの論点を指摘しよう。

図5 消極的および積極的平和³⁾



第一、このような積極的平和軌道からの「外れ」はなぜ起こるのか。そこには構造的暴力および文化的暴力が意識されないまま強力に作用しているであろう。

第二、「外れ」が起ったとき、X・Y間の衡平が破れるから両者間には格差が生じる。その格差が遞減するか遞増するかは、構造的・文化的暴力を克服しようとする諸力、すなわち生成される構造的・文化的平和の強靱さに依存する。

第三、Y軸上の戦争と、第三象限のMADに至る対角線上の戦争とは全く性格が異なる。前者は第I象限（積極的平和）と第IV象限（構造的暴力）の境界で起こり得る大きな武力紛争である。後者は敵の絶滅を意図するみな殺し戦争である。現代ではそれは必然的に核戦争であろう。留意すべきは両者とも同じ軌道上で起こることである。

おわりに

ガルトゥング平和学はその全体系を通じ、次の諸点をわれわれに示している。

- (1) 現代において戦争は回避可能であり、ゆえに、戦争は現代における最大の暴力である。
- (2) 戦争回避のための手段は、紛争の平和的転

換である。

(3) 国家・資本・市民社会・メディア等のいかなるアクターであれ、紛争の平和的転換のための主体となり得る。

(4) 社会を構成する一般のわれわれが、日常的にコンフリクトを意識し、その平和的転換を実践することが、最悪の戦争を回避するための最も基本的な要素である。

これらの諸点を体系的に示していることの中に、ガルトゥング平和学の現代的意義があると筆者は考える。

【注】

- 1) 本稿の内容は、筆者が編訳著者または著者である次の著作および論稿によっている。
『ガルトゥング平和学入門』、法律文化社、2003年。
『ガルトゥング紛争解決学入門——コンフリクト・ワークへの招待』、法律文化社、2014年。
『ガルトゥング平和学の基礎』、法律文化社、2019年。
『状態としての平和から過程としての平和へ』、日本平和学会編『平和学事典』丸善出版、2023年、所収。
『ミクロからマクロの平和』、同上。
- 2) 図4は筆者による。行為者と当事者の相互移行の解明は、優れて現代的な課題である。
- 3) 図5は、筆者が今回訳出したガルトゥング『平和の理論』の2「平和の理論：ドゥッカおよびスカ」にある図1をベースに、筆者なりの問題意識を付加し作図したものである。